2019年
12月17日
火曜日

隔たり、迷い、帰還

栗田　匡相　准教授（開発経済学）

「シモーヌ・ヴェイユは、大西洋の向こうの友人への手紙にこう書いている「わたしたちはこの隔たりを、友情によって織りなされたこの距離を愛することにいたしましょう。なぜなら、互いを愛することのない者は隔てられることもないのですから」。ヴェイユにとって、愛とは彼女と友人の隔たりを染めて満たしている大気のことだ。たとえその友人が戸口まで来訪したとしても、決してふれあうことの出来ない隔たりがどこかに残されている。近づいて胸に抱いたとしても、両手が包むのは謎、知ることのできないもの、決して手に入れることの出来ないものだ。最も近いものにさえ密かに遠いものが浸み入っている。結局のところ、私たちは自らにどれほどの深さがあるのかほとんど知らない」

レベッカ・ソルニット

「私はとても幸せよ。だって私が幸せじゃなかったら私は道を間違えてしまうの。私が道を間違えたら家族は生きていけないわ」。彼女の家は川のすぐ脇にあり、雨期には毎年のように家が水没する。家の周囲には家畜の糞尿と様々な廃棄物とがあふれている。肉はほとんど食べられず、食べても安い内臓ばかり。子どもを学校に行かせ続けるのは難しく、お金が入り用になる年度の初めには毎年とても苦しい思いをする。それでも彼女は屈託の無い笑顔で、急な訪問者である見知らぬ外国人にも興味を示してくれた。ホテルへの帰途の中でどれだけ頭を巡らしても、道を間違えることの出来ない彼女の幸せに私の想像力が届くことはついぞ無かった。

「兄は今、刑務所にいるわ。罪状は殺人と強姦。でもね、そんなこと全くしていないの。ガソリンスタンド経営の豚親父の罪を着せられて服役してるの。裁判官を買収するのは一〇〇万円で出来るから、あいつにとっては大した金額じゃないみたい。これまでも何回かそういう罪で捕まってるけど、すぐに出てくるわ」。知り合いの家族がマダガスカルの刑務所に服役している。しかも罪を着せられてだ。やっすいテレビドラマを見ているわけではない。全くの意味不明だ。刑務所から脱獄した複数の服役囚が近隣の村に潜んでいる可能性があるので注意するようにというラジオのニュースが調査中に流れたことがある。平和ぼけの日本人にはそのニュースを正しく理解することは出来なかった。そして今、知人の家族が服役している事実を前に、なおさら脱獄のニュースを正しく理解することが出来なくなってしまった。

我々はこうした計り知れない現実をそれでも測ろうとしていつも何かをつかみ損ねる。計り知れなさは計り知れないまま時間をかけて受けとめることが必要なのに、隔たりの絶望故に我々は眼前に展開されている世界から目を背けることに成功するのだ。そしてその成功の後には忘却が到来し、我々はつかみ損ねた何かをつかむことが出来なくなる。でも世界の悲劇に真の亀裂を入れるためには、忘却の彼方からまた計り知れない現実の方へ立ち戻る必要がある。かつていた場所に立ち戻ったときに我々は本当に世界を、自らを、隔たりの意味を知ることが出来るのだ。だから君はあの場所へ帰還しなければならない。彼らのためだけではなく、あなた自身の人生のために迷うことを恐れるべきではないのだ。■